第 92 回日本薬理学会年会　ダイバーシティ推進セミナー

広げよう“イクボス”

3 月 14-16 日に大阪で開催された第 92 回日本薬理学会年会のダイバーシティ推進企画に参加してきました。サブタイトルは「広げよう “イクボス”」。なお、“イクボス”とは、「職場で共に働く部下・スタッフのワークライフバランスを考え、その人のキャリアと人生を応援しながら、組織の業績も結果を出しつつ、自らも仕事と私生活を楽しむことのできる上司（経営者・管理職）」を指します（NPO 法人 Fathering Japan HP より）。

今回は、大学、研究所、および製薬企業と異なった所属の 4 名にお集まり頂き、育児と仕事を両立するなかで“イクボス”からの支援で有難かったことや要望、また現在“イクボス”の立場にある方からは日頃心がけていることなどをお聞かせ頂きました。

“イクボス”である五嶋良郎氏（横浜市大・医・分子薬理神経生物　教授）は、個々人には様々な属性（大学内での立場、地域での立場、家庭での立場など）があり人間として全員が等しい権利を持っていること、一人一人が大事なチームの一員であることを認識することの重要性を説かれました。一方、陰ながら育児を仕事の両方を頑張っている男性職員に気付かず、支援をし損ねてしまうことについてお悩みとのことでした。

齋藤みのり氏（アステラス製薬研究本部　研究企画部長）は、育児中にも成長の機会を奪わずに対等に接してくれた上司への感謝と、“イクボス”となった現在心がけていることをお話下さりました。育児中は周囲とのコミュニケーションを取りつつ自身の仕事を「見える化」して、仕事をスムーズに回す工夫をすることなど、実践的なお話もありました。

十川千春氏（岡大・歯科薬理　准教授）は、学内に整備された保育園ならびに学童保育や、講座のスタッフの見守りに助けられたこと、限りある時間を有効に使うためのスケジューリ

ングをきちんと行うことの大切さを、村松里衣子氏（国立精神・神経医療研究セ・神経研　部長）は、型にはまった制度を押しつけるのではなく、個々人の個性を理解した上で、それぞれにあった支援をすることの重要性をそれぞれお話下さりました。

“ワークライフバランス”の考え方が浸透するに従い、育児中の女性研究者だけでなく“イクメン”も増加しています（介護についても同様です）。制度も充実しつつあります。実のあるダイバーシティ推進には、彼ら彼女らが支援を受けやすい環境整備や、仕事の質の確保などが今後の課題かも知れません。ただ、今回の 4 名の先生方の4名とも、周囲への心配りを第一に考えられているように感じられました。支援する側される側双方がお互いに思いやりや感謝・リスペクトの念を持つことが大切だと感じました。

薬学部 病態薬理学講座

分子細胞薬理学分野

斉藤 麻希